

来日中の超絶技巧派ギタリスト、マイケル・オーランド氏を今回の国内ツアーのリハーサル場所としている東京のライブハウス、沼袋サンクチュアリーに訪ね、彼がエンドース契約をしているロケットロンの最新鋭モデルについて話を伺った。オリジナル・モデルからリファインされ、一段と進化し強力になったギター・プリアンプのPROPHESY 2、そして軽量、コンパクトながら300ワットの出力を誇るパワーアンプのVELOCITY 300など、最先端・最新鋭モデルの実力を探ってみた。

抜群の操作性

--- まず今回のシステムの中核となっている、PROPHESY 2について話を聞かせて下さい。Michael Orland（以下M.O.）：とにかく全てが揃っているプリアンプなんだ。クリーンからディストーションまでの幅広いアンプ・シミュレーションや、リバーブ、ディレイ、タップ・ディレイ、トレモロ、モジュレーション系のフェイザーとかピッチ・シフターなど、必要と思われるほとんどのエフェクトが揃っている。それも広がりのあるステレオだね。スピーカーを10インチや12インチで選べたり、マイキングまで調整できるスピーカー・シミュレーションしたアウトプットもあって、ボクのレコーディングではほとんどマイクを使わずに、ダイレクトにレコーディング・コンソールに繋いでいるんだ。実際にボクのセカンド・アルバムでは、ギターの録音に一切マイクを使っていないしね。特にユーザー・インターフェイスが良く考えられていて使い易い。例えばこのゲイン・ツマミに手を伸ばせば、それだけでクランチからハード・ディストーションまで思いのままにコントロールできるんだ。これまでのこういったラック・タイプのプリアンプって、パラメータを選んでバリューを変更するみたいな操作のものが多かったんだけど、これはまったくギターアンプ感覚で使えるレイアウトになっていて、ゲイン、ベース、ミッド、トレブルというツマミがあるから直感的なんだ。

--- つまりライブ演奏中にちょっとサウンドを変えたいというような時にも、ツマミに触れるだけということになるんですね？ M.O.：そうなんだ。そこが一番気に入ってるポイントだね。パッチ・メモリーの数も充分あるしね。それとこのインプット・レベルのコントロールも特徴的で、とてもクールなフィーチャーだ。例えばゲイン・コントロールを“2”くらいにセットしていても、インプット・レベルを上げていけば、かなりハイゲインなサウンドになる



ロケットロンから近日発売予定のマイケル・オーランド氏シグネチャー・モデルのワウ・ペダル。ベース・モードに加え、氏のアイデアによるユニークなミックス・コントロールを装備している。

んだ。まるで真空管のプリアンプの前でクリーン・ブスターを使ったような感じだね。もちろんギターをシングル・コイルからハムバッカーのヤツに持ち替える時なんかにも便利で、このインプット・レベルをアジャストするだけで同じパッチが使えるからね。

ウルトラ・ローノイズ

--- ところでさっきからかなりハイゲインなサウンドなのに、ノイズがほとんど無いのを疑問に思っていたのですが？ M.O.：あ、それはあのロケットロンの“HUSH”ノイズ・リダクションを搭載しているからだよ。この“PAGE”ツマミを回していくとHUSHのパラメータを調整することができるんだけど、例えばこれをオフにしてもノイズは十分に少ないんだ。それと以前からある他のノイズ・リダクションと違って音質への影響がとて少ないんだ。ほとんど無いと言える。テクノロジーの進化だ(笑)。ノイズゲートともまったく違うモノだしね。だからボクは基本的には常時HUSHを使っているんだ。シングル・コイルのピックアップを使う時とかは絶大な威力を発揮するからね。レコーディングの時にラインでダイレクトに録音するんだけど、サウンドはいつもクリスタル・クリアーだよ(笑)。

使い易い内蔵エフェクト

M.O.：この“PAGE”を回していくと、エフェクトとかのエディットができるんだけど、それも全てツマミで操作できることも直感的なんだ。例えばコンプレッサーを選べばディスプレイにアタック、リリース、スレッシュホールドといったパラメーターが表示されて、その下のツマミを回すだけで。ディレイやトレモロとかも同様で、基本的にボタンを押してツマミを回すという操作で、ほとんどのことができてしまうんだ。フロアに置いているストンプ・ボックスのツマミを、しゃがみこんで触るみたいな感じだね。内蔵のエフェクトはエクスペッション・ペダルでコントロールすることも可能だ。例えばワウとかね。ボクは自分のシグネチャー・モデルのワウ・ペダルを使っているから、この機能は使わないんだけどね(笑)。ボクが特に気に入ってよく使ってるクールなフィーチャーが、ダッカー・ディレイだ。音を切った時だけディレイ・サウンドが残って、ギターを弾き続けている間はディレイがかからないという機能だ。ディレイがかかりっぱなしだとフレーズとかが濁ってマディになってしまうんだけど、音を切った時にはアンビエント的にディレイがかかってくれるから、それが良いんだよ。



独自のDynamic Tube Replication Technology (DTR)による上質なチューブ・サウンドと抜群の操作性を備えた、ハイエンド・モデルとなるギター・プリアンプ・マルチ・エフェクトのPROPHESY 2。モデリング・アンプのバリエーションではなく、4チャンネル構成のギターアンプという考え方が基本となっている。エフェクトはプリとポストの2系統を搭載。PROPHESY 2 (上段) 価格：28万8,750円、Velocity 300 (下段) 価格：6万3,000円

MICHAEL ORLANDO vs SYU

ROCKTRONの最新兵器の検証

PROPHESY 2 / VELOCITY 300 / WAHPEDAL



特にハイゲイン・ディストーションを好むギタリストにとって、不可避の問題として着いて回るのがノイズの問題だ。ロケットロンは独自の“HUSH”というノイズ・リダクション・システムも世に送り出し、それがハイエンドのスタジオ機器並のクオリティを持ちながら、ギタリストのニーズを充分に考えた仕様であり、一躍ロケットロンの名を世に知らしめたのだ。同社から登場した最新鋭機の実力を、マイケル・オーランド氏とSyu氏の二人のトップ・プロ・ギタリストが徹底解説&検証する。(文：アイク植野/Ike Ueno)

Syu[GALNERYUS/SPINALCORD]

ネオクラシカル/メロディック・スピードメタル・バンド、GALNERYUSのギタリスト。新たにボーカリストに小野正利を向かせ、6月23日に6thアルバム「RESURRECTION」をリリースする。ヘヴィメタルの芯を持ちながら、キャッチーな歌メロディーを追求したSPINALCORDでも活動中。

Michael Orlando
9歳よりギターを始める。両親の影響によりレスポールの曲を徹底的に叩き込まれ、13歳からプロ活動を開始、バンドCITIESで初デビュー。2008年には米ギタープレイヤー誌のギター・スーパースターのトップ10入りを果たす。その後、自身のインスト作品「Sonic Stomp」を発表。

多彩なアンプ・サウンド

--- アンプ・シミュレーションのバリエーションはどれくらいあるんですか？ M.O.：クリーン・アメリカン、テキサス・ブルース、ヴァンテージ・プリティッシュ、メガ・ドライブの4種類。それだけだよ。でも、ゲインのストラクチャーって言うか、可変幅は無敵大と言えるほどで、例えばクリーン・アメリカンのモードでもゲインを上げていけば、しっかり歪んだクランチ・サウンドになる。単なるクリーン・サウンドじゃないんだ。テキサス・ブルースのモードでも同じだ。軽めのクランチから、ハード・ロックにもマッチするディストーション・サウンドまでカバーするんだ。異なるタイプのドライブ・サウンドっていうのが、とにかくほとんど全てのギター・サウンドを生み出すことができるんだ。クリスタル・クリアーなフェンダー系のクリーン・トーンから、それにチューブ・スクリーマーを繋いだようなクランチなブルース・サウンドまで自由に変化させられる。

このPROPHESY 2のスゴいところは、この4つのモードでほとんど全てのギター・サウンドを生み出せるところだね。他のメーカーのこういったプリアンプは、モデリン

グ・アンプのバリエーションのスペック上の数を競っているみたいなどころがあるよね。でも“15種類搭載！”とかって言っても、そのどれも本当のアンプっぽいサウンドじゃなかったりするしね(笑)。

高い表現力

--- ピッキングだけでも多彩ですし、タッピングとか様々なテクニックを駆使されていますが...？ M.O.：そう、そこなんだ！それがボクがこのPROPHESY 2を中心にしたシステムを気に入ってる理由だ。とにかくボクは自分のサウンドを“クリーン”に保ちたいんだ。クリーンと言ってもクリーンなトーンっていう意味じゃなくて、かなりのハイゲイン・サウンドで広い音域を使った速弾きにしても、一つ一つの音のアタックがはっきりとツブ立っていて欲しいんだ。そういう意味での“クリーンさ”ってことだよ。ボクのベーシックなギター・サウンドはメガ・ドライブのモードで、時々ストンプ・ボックスのオーバードライブ・ペダルで軽くブーストしてる。チューブのプリアンプと同じように、耳障りな歪み方は皆無で、ナチュラルにエッジがあってパンチの効いたリード・サウンドになるんだ。

パワーアンプの常識を打ち破る？

--- ハードなディストーション・サウンドでも、クリーンなトーンでも、すごく暖か味のあるサウンドですね。M.O.：あ、それはPROPHESY 2もあるんだけど、この新しいパワーアンプのVELOCITY 300による部分もかなりあるね。ソリッドステートなんで、こんなにコンパクトなのに300ワットのパワーがあるんだけど、それでいてまったくチューブ・アンプみたいなんだ。チューブ・アンプの出力トランスのような特性を再現する新しい回路が使われているのも、大きな効果があるみたいだ。

Syu氏の試奏インプレッション

まずこのPROPHESY 2とVELOCITY 300の組み合わせた形で音を出した印象ですが、特にローが豊かにしっかりと出ている感じでめっちゃ好みます。このローの部分にはVELOCITY 300の方のREACTANCEコントロールの威力ですね。これを絞ると、まるで違うキャビネットを使っているような感じになります。VELOCITY 300のDEFINITIONコントロールはプレゼンスとは違うんですが、明るくブライتناサウンドになるんですが、それでいて決して耳にイタイ感じじゃなくて良いです。1Uサイズのトランジスターの300ワットなのに、とにかくこのパワーアンプのクオリティが高くて驚きました。

PROPHESY 2はとにかく操作性が抜群です。トーン・コントロールのミッドがアクティブっぽくはないんだけどしっかり効いてくれて、ミッドレンジが常にあるって感じです。ミッドレンジの主張というかヌケが良いので、なんでもイイ音に聴こえてしまう(笑)。インプット・レベルを上げていっても、耳障りな歪みとかじゃなくて、とてもチューブっぽい軽い歪みとコンプレッション感が増してくるって感じで気持ちが良いです。ゲインとの組み合わせで歪みのバリエーションが広がりますね。クリーン・サウンドでもこのインプット・レベルを調節するとすごくイイ感じのクリーンになりますね。



“REACTANCE”コントロールでサウンドにボディっていうか、真空管アンプみたいな音の太さと豊かな低域を加えることができる。“DEFINITION”というツマミは、チューブ・アンプのレゾナンスとかプレゼンスのようにサウンドを明瞭にして、“BITE”っていうか、エッジを効かせてくれるんだ。プレゼンスともちょっと違って、クリアーさがあってタイトになるんだよ。トータルに亘ってチューブ以上にウォームでチューブらしいんだ(笑)。PROPHESY 2のアウトプット・レベルを上げて、大きなシグナルをVELOCITY 300に突っ込んでも、ソリッドステートの不快な歪み方はしないし、むしろ気持ち良いくらいサウンドになる。本当にスゴいよ。それに150ワット×2のステレオになってるんだけど、パワー感も真空管アンプと同様で充分なものなんだ。もう大きくて重いチューブのパワー・アンプを運ぶ気にはならないね(笑)。PROPHESY 2とVELOCITY 300をラックに入れて、それにロケットロンのステレオ入力を用意した4×12インチのキャビネットだけで、カンペキなシステムなんだ。マーシャルの1960とかのキャビネットもステレオ入力の付いているヤツがあるから、面倒な時はラックだけ持って行くんだけどね(笑)。

この2つのモデルのコンビネーションで“完成されたアンプ”というか、とにかく“アンプっぽい”です。レコーディングでラインアウトも試してみたいですが、ライブとかだと基本的にキャビネットに繋いで鳴らすことになりですね。実際に北海道のツアーとかだと自分のシステムを全部持って行くことが難しいんですが、この2つをラックに入れば飛行機の機内にも持ち込めそうですしね。よくツアーで行った先の会場で、現地手配のキャビが“終わってるヤツ”だったりするんですが(笑)、このシステムだったらボクが拘っているローの心配が全く無さそうです。PROPHESY 2にもREACTANCEコントロールがあるので、現地調達アンプのエフェクト・リターンを使うなんてのもできそうです。

まだ発売されていないそうですが、マイケルさんのシグネチャー・モデルのワウもとても気に入りました。ワウそのもののサウンドも良いんだけど、このユニークなミックス・コントロールってのはスゴく良いアイデアです。ワウ・サウンドとダイレクト音のミックス・バランスをコントロールできるんですが、半開き状態で使ったりする時にファットさが出せるんです。ワウの“鳴き”の感じはそのままで、ファットなサウンドなんですからスゴく使えますと思います。ボディのカラーも好きだし、絶対売れますよ、コレ。ボクも欲しいです(笑)。